



シングルマザー

Single Mother

別れと出逢い

Kusumi Yasumasa

久住 泰正

青山ライフ出版

装幀 / イラスト 溝上なおこ

■ 目次

シングルのマザー	
— 別れと出逢い 5
都会の片隅で 149

シングルマザー

— 別れと出逢い

山々に囲まれた遠野の夏は気怠い。山林の静寂さは、蟬の鳴き声によつてかき乱されていた。

アパートの一室では、生まれてまだ八カ月の娘と二歳の男の子が昼寝をしていた。その傍で扇風機の回る音が微かに音を立てていた。うつむいていた藍子が顔を上げて健史を見た。

「あねこ（女）ができたのが」

藍子は疑いのまなざしで言った。

「そんなんじゃないけど……」

健史は、力のない返事をした。

「じゃ、なんで離婚せねばならんの」

藍子は、健史の急な言葉に戸惑いを感じていた。

「おら、童っ子（子供）育てられねえ」

「誰だつて、自信ねえ。だから夫婦できばる（頑張る）んだべな」

藍子は強い口調で言った。

健史は俯いたままだった。その姿は、結婚当時の強い健史ではなかった。背を丸くしてうつむく健史に、藍子は憐れにも似た感情になった。

「ほかに本当の理由があるだべ」

健史は女を否定しているが、本当は女が出来たのだろうと藍子は思っていた。この五年間共に生活してきて、健史の性格や考えが分かってきた。

「童っ子ができだ」

「えっ！」

「童っ子ができだ」

健史は小さな声で繰り返して言った。

「童っ子って、ほがのあねこの？」

藍子は我が耳を疑った。

健史は何も言わずに頷いた。

藍子は、天を仰いだ。しばらくして涙が溢れてきた。

「なしで、なしで」

それ以上言葉にならなかった。

「童っ子を下ろせとへる（云う）ごどもきがねえで、生むとへるんだ」

健史は、弁解がましく言った。

「童っ子を殺すのが」

藍子は、胸が張り裂けそうになった。自分も生みの苦しみを二回も経験して命を授かった。簡単に墮ろせばいいと言った健史の言葉が悪魔の囁きのように聞こえてきた。

「んだば一生面倒みるとへわれ（云われた）たべ」

健史はまた弁明した。

「浮気をすんれば、こうなることぐらい分からなかったのが」

藍子は、健史を見つめた。

「遊びのつもりだったがあ」

健史は、後悔しているように言った。

しかし、健史は取り返しのつかない事をし、どうしようもない所まで追い込まれていた。

「少し頭っこを冷やすといいべ」

藍子はいくらか心の動揺が収まったのか冷静に言った。

健史と藍子は結婚して三年、いや、同棲して五年と言った方がいだろう。地元の高校を卒業してまもなく同棲を始めた。

高校の頃の健史はかつこよかった。陸上部で短距離ランナーとして活躍していた。県大会にも出場し女子生徒から憧れの的だった。

高校三年の時、藍子と同じ組になった。放課後、陸上部にいる健史の所に藍子が行った。帰り道が一緒の方向という事もあるが、藍子の憧れの人でもあった。

陸上部の部室まで行った時、ちょうど健史が出てきた。

「よおー」

健史は右手を少し上げて挨拶した。

藍子は「うん」というように顔を少し動かした。

「あのー、これから帰るんだべ」

藍子は小さな声で言った。胸は張り裂けそうに音を立てているのが聞こえてくる。

「ああ、一緒に帰っか」

健史はさすがに目をして言った。

藍子にとつて初めてのデートが二人で帰るあぜ道だった。

あの時の胸の痛みは、今でも覚えている。おそらく二度とはないだろう青春の思い出だった。

二人の仲は、クラスでも噂になるほどになった。それでも藍子は嬉しかった。健史といるときが一番幸せだった。

卒業が近づくに連れて、藍子は健史との結婚を意識し始めていた。

しかし、親は猛反対だった。健史の両親も同じだった。

理由は簡単だった。まだ若すぎるという理由だ。

藍子にはその意味が分からなかった。好きな人がいれば結婚するのが当たり前だと思っていた。健史と二人で働けば何とか生活はできると信じていた。

卒業の日、二人はそのまま家に帰らなかつた。これは二人で決めていた事だった。親に反対され結婚できないなら死んだ方がましだと思つた。二人は、これ以上離れて暮らすことに耐えられないでいた。卒業は良い機会になった。この日に、二人のかけ落ちが始まつた。

「後悔しないべか」

健史は、ホテルのベッドに横たわる藍子を見つめて言った。

「うん」

藍子は小さく頷いた。健史の唇が藍子の顔に静かに覆いかぶさってくる。藍子は目を閉じた。

生温かい健史の唇が藍子の唇と重なりあった。

声にならないため息が藍子から漏れた。

藍子が始めて知る男の匂いと身体だった。

それから二年間は、親の承諾もない中、同棲生活を始めた。

藍子にとって初めて暮らす男との生活だった。健史は町工場で働いた。藍子はアルバイトで店員をやっていた。二人で働いて何とか暮らしていった。楽しいひと時だった。親が若いと結婚を反対した理由が分からなかった。自分達が正しいと思っていた。この二年間は親とも連絡を取っていなかったが、小さなこの町では、元気でいる噂は聞こえていた。

二十歳になって自分の意思で結婚出来るようになり、藍子の誕生日に役場へ婚姻届を出した。

その時は、お腹に新しい命が宿っていた。

藍子はお腹で動く小さな鼓動に女としての喜びを感じていた。妊娠した藍子を気遣い健史はとても優しくかった。

藍子は幸せをかみしめていた。やがて、男の子が生まれた。

男の子の名前は「篤史」と名付けた。

平凡な田舎暮らしだが藍子は幸せだった。この町に生まれ、育ち結婚してこの町に暮す。それは藍子にとつ